

中国語の奥秘 日本語の機微

—— 辞書の語釈・用例に見る両言語の表情と両国の国情 (1)

夏

剛

言葉の魔力：「心の城府へ通う唯一の小道」

アイヌ語研究の第一人者・言語学者金田一京助は東京帝国大学を卒業した1907年の夏、アイヌ語学上の疑問の解決とアイヌ特有の叙事詩の伝承を夢見た「誘惑」から思い立って、「歴史的思い出の多い」「新版図」樺太南部を初めて訪ね現地アイヌ語の採集を試みたが、30年振りに日本に帰還した当地では民族差別等の疎外に苛まれている住民の黙殺に遭い、片言雙語も取れぬ3日間を過ごし「唾の上に盲にさえ生まれて来たかのような寂寥を感じ」た。「不安の憂悶が頭をかき乱し」た彼は無心に遊んでいる子供たちへの質問も無視されたので、為す術も無く1人の子を写生し始めた。すると彼等が寄って来て画面を見、肢体の名称等を次々と現地語で喋って騒いだ。巧みな誘導で忽ち74語を集めた少壮学徒は川原で鱒を捕えている大人たちの処に行き、「覚えたばかりのほや〜の単語を勇敢に使ってみた」。思いも寄らない事に、顔を顰めていた人々は皆笑って白い歯を現した。彼は衆人の態度を一変させた言語の魔力に感激し、「片言をいうまで」(『科学画報』, 1931年[発行月不明])で次の様に述懐している。「たった、こうした間に、私と全舞台との間をさえぎっていた幕が、いっぺんに、切って落とされたのである。さしも越え難かった禁園の垣根が、はたと私の前に開けたのである。ことばこそ堅くとどした、心の城府へ通う唯一の小道であった。」

40日の滞在で京助は大抵の話は支障が無くなった上で、樺太アイヌ語文法の大要と4千の語彙、『北蝦夷古謡遺篇』3千行の叙事詩の採録を家苞に、言葉の伝授と心の交流をしてくれた部落の老若に別れを告げた。7年後に『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』(全2巻, 東洋文庫論叢, 1931年)に由って学士院恩賜賞を受けたが、上記随筆に記されたその前年の樺太踏査の4日目の劇変が大成の原点を為している。「渠成って水到る。こゝに至って、私は何物をもためらわず、すべてを捨てて、まっしぐらにこの小道を進んだのは、ほとんど狂熱的だった。」「片言をいうまで」は後に「心の小道」(又は「心の小径」)に改題され、岩波書店の中等学校用教科書『国語』

巻3に掲載され、以来多くの教科書にも採用された¹⁾が、これも国語審議会委員の就任(52—58年)等と共に国語の発展への貢献に数えられよう。彼が筆頭編集顧問を務めた『日本国語大辞典』第1版(日本大辞典刊行会編, 小学館, 全20巻[21冊], 72[逝去の翌年]—76年)では、「きんだいち—きょうすけ…キョウスケ【金田一京助】」の項目が設けられている。第2版(日本国語大辞典第2版編集委員会・小学館国語辞典編集部編, 全14巻[15冊], 2000—02年)の「きんだいち—きょうすけ【金田一京助】」でも、2カ所を除いてその儘踏襲した説明には「言語学者、国語学者」と有るが、『広辞苑』第6版(新村出編, 岩波書店, 08年)の同項目には「国語学者」は無い。代表的な名著の2点中には国語分野の業績も併記されているが、同辞書の【日本語】の「②日本語の別称」と照らすまでもなく、故人が多くの物を捨てて究め続けた「小道」のアイヌ語は「大道」なる国語ではない。

違和感の正体：価値判断・思考様式の相異

『広辞苑』(辞書の引用は特に断りが無い限り最新版に拠る)の【金田一京助】の項目は、「言語学者。盛岡生れ。東大・国学院大教授。アイヌ語・アイヌ文学の研究を開拓。石川啄木と親交があった。著『ユーカラの研究』『国語音韻論』など。文化勲章。(二九三三)」と為っている(文中の『』は原文では「」であるが、引用符「」と区別する為に書名等を表すこの符号を使用した)が、限られた紙幅を割いて石川啄木との親交を特記した処は些か奇妙に感じられる。尤も、関連項目の「いしかわ—たくぼく【石川啄木】」でも、「歌人。名は一はじ。岩手県生れ」と「社会思想にめざめ、和歌の革新を志し、[下略]」との間に、「与謝野寛夫妻に師事」と1文(出身地を記す前文と同じく句点で完結)で人脈に触れており、「よさの—ひろし【与謝野寛】」の紹介も「詩人・歌人。初め鉄幹と号す。京都生れ。晶子の夫」の次に、「落合直文に学び、浅香社・新詩社の創立、『明星』の刊行に尽力、[下略]」と書いてある(横書きの電子辞書では文中の読点は点「、」であるが、本稿では掲載誌の規定に従ってコンマ「,」を基本とする一方、日本語の中黒「・」に当る中国語の並列点「頓号」[、]を以て構文上の細分化に対応した)。更に中国の唐代の詩人から例を取れば、「りゅう—うしゃく【劉禹錫】」の事跡に「晩年は白居易と交わり、劉白と並称された」と有る。『日本国語大辞典』の同項目の「柳宗元や白居易と親しく、応酬した詩も多い」と同様に、交友関係への言及は相互影響や歴史的な評価の明記や示唆が有れば必然性が伝わって来るが、2人の親交が有った事実だけを孤立的に伝える単純な記述ならどこか唐突な印象を免れない。

「片言をいうまで」を巻頭に掲げた『ユーカラの人びと 金田一京助の世界1』(金田一京助著、藤本英夫編、平凡社ライブラリー、2004年)の表2(表紙の裏、見返し)の著者略歴でも、「国学院大学教授、東京大学教授を歴任」の次の段落として、「盛岡中学時代には短歌を詠み、与

2(340)

謝野鉄幹主宰の『明星』の同人となる。石川啄木とは高等小学校以来、啄木が亡くなるまで親交があった」と記されている。次の段落と為る「東京大学の学生時代にアイヌ語に関心を持ち、その研究は、アイヌ語、アイヌ文学、アイヌ文化全般にわたって生涯続けられた」は、^{ライフ・ワーク} 畢生の事業の起点及び幅広い分野に関する紹介にも拘らず啄木絡みの上記経歴より短い。『日本国語大辞典』の【石川啄木】の中の「与謝野鉄幹」の表記は『広辞苑』との差別化に成るが、広く知れ渡る様に啄木は与謝野晶子等の短歌に傾倒し新詩社の機関誌『明星』(1900年創刊)に投稿し、1905年に小田島書房より世に送った処女詩集『あこがれ』に鉄幹の跋文が寄せられている。彼は文学への志を抱く様に成った中学時代には1学年上の京助との親交を深め、08年上京後は貧困・逼迫の中でこの無二の親友から金銭面を含む様々な支援を受けた。蔵書を持ってまで用立てた等の献身的な援助²⁾は啄木の生活の保障・創作の大成に貢献したが、2人の親交が【石川啄木】の項目で取り上げられず【金田一京助】の方で特筆されたのは、実情を知らない人(特に外国人)には啄木が京助を際立たせる「借景」の如く映りかねない。

啄木と同じ1886年に生れ、京助と同じ1971年に死去した女性運動家平塚らいてうは、1911年に中心と為って女性文学者に由る「^{せいとう}青鞜派」を結成し機関誌『青鞜』を発足させた。創刊号を飾った「元始、女性は太陽であった」と言う彼女の^{おたけ}雄叫びに因んで譬えるならば、^{こゝ}此処では京助の輝きは啄木の「陽光」を浴び且つ反射する「月光」の様な感も無くはない。中国の類書での類似の場合の記述は個人の主体性や他者との力関係等に敏感な国柄に由って、社会(含・^{ふくむ}文壇)活動や独自の業績等の主眼との関連が薄い私的な交友は割愛され勝ちで、対象に絞る^{ピン}焦点の^ぼ暈けや非対等的と思われる他者との関連付けは忌み嫌われる節が有る。斯うした違和感^{うが}は穿った見方の様でありながら中国的な価値判断や思考様式を垣間見せるが、同一人物に関する日本の関連書籍の記述・評価にも視点や感覚の色々な相異が見られる。

「虚声」と「巨星」：伝説的な国語辞典の内実

『日本国語大辞典』第1版の【金田一京助】の前に「きんだいち【金田一】」の項目が有り、「(“きんだいち”とも)岩手県北端部、二戸市の地名。江戸時代は奥州街道の福岡と三戸との間にあった宿駅。現在はリンゴの栽培が行なわれている。金田一温泉がある」と説明されている(第2版の語釈も同じ)。第2版の【金田一京助】は『広辞苑』と同様に、同版で新設された「きんだいち【金田一】」の項目(語釈は「姓氏の一つ」)の唯一の子見出しとして在るが、『広辞苑』と対照的に【石川啄木】の項目より多い字数で人生と学問の歩みを綴っている。冒頭の上記2つの肩書と最後の年号・西暦併記の生卒年「明治一五～昭和四六(一八八二～一九七一)」との間に、『広辞苑』より肩書・業績及び受賞歴を重視する形で次の様に記述されている。「文博。盛岡市出身。東京帝大言語学科卒。東大教授、国学院大学教授を歴任。昭和七年(一九三二)

に『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』によって学士院恩賜賞を受ける。学士院会員、国語審議会委員。昭和二九年文化勲章受章。アイヌ語研究の第一人者。著『アイヌの研究』『国語音韻論』など。(初版と異なる点は①「昭和二九年」の後の「(一九五四)」の削除、②「アイヌ研究」→「アイヌ語」の修正。) 此処に出ていない彼の短命の歌人(1886—1912)との接点は同県出身の縁であり、啄木が東京上野駅で詠んだ「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」(初出=『東京毎日新聞』1910年3月28日)から、国語審議会で標準語部会長を務めた金田一博士の標準語制定に懸けた熱意が連想され、それは又同じ1950年代の中国で非標準語話者が標準語を推進した動きと二重映しに成る。

戦中から半世紀にも亘って世間に流布していた「辞書と言えば金田一」の伝説は、国語の領域に於いても採集・整理の名手であるという幻想を作り上げて了った。『ユーカラの人びと 金田一京助の世界1』の著者略歴は、「国学院大学教授、東京大学教授を歴任」と年代順に沿って職歴を挙げている処が、両大学の順位に従って逆の並び方をした『日本国語大辞典』『広辞苑』よりは史実に合致する。『講談社 日本人名大辞典』(上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修、2001年)の「きんだいち-きょうすけ【金田一京助】」でも、「大正11年国学院大学教授、昭和16—18年東京帝大教授」と実際の順番で記載している。これに続く「知里幸恵、金成りマツらの協力をえてアイヌ民族の言語、文学、民俗をはじめて体系的に研究し、〔下略〕」は、高名な学究の陰の案内者・協力者に光を当てて顕彰した処が客観性・公平性を感じさせるが、「29年文化勲章」と最後の「昭和46年11月14日死去。89歳。岩手県出身。東京帝大卒」との間の「国語辞書の編集や石川啄木との交遊も知られる」は、逆に実際の編者の手柄を雲の上の老大家に帰属させた誇大宣伝を容認している嫌いが有る。

『20世紀日本人名事典』(日外アソシエーツ編集・発行、全2巻、2004年)の【金田一 京助 きんだいち-きょうすけ】では、「また、石川啄木との交友もあり、『石川啄木』なども刊行」の件は、結びと為る次の「随筆集としても『北の人』『心の小徑』などがあり、『金田一京助全集』(全15巻)が刊されている」と共に、啄木との交友を著述と結び付けて気味が好い。その前の「アイヌ語のほか言語の面でも活躍し『言語研究』『国語音韻論』などを刊行したほか『明解国語辞典』や『辞海』を編集し、42年日本言語学会会長に就任」には、直前の「29年文化勲章を受章した」の間には相互因果関係が感じ取れる。『ユーカラの人びと 金田一京助の世界1』の著者略歴にも、「一方、国語辞典や教科書の編者としても知られ、現代仮名遣いについての提言も行った」と書かれている。編者は『金田一京助』(新潮選書、1991年)の著者として故人の事績を熟知しているはずなのに、『日本国語大辞典』『広辞苑』の説明で触れていない辞書編纂という虚名を実績に数え、第26章「三省堂の目玉商品『中金』と『明解国語辞典』」の中で、「昭和二十年代には、かなりのエネルギーを教科書と辞書に向けている」と礼賛した。ところが、『日本国語大辞典』第1版の編集委員等を歴任した長男金田一春彦(国語学者)も認めた通り、

実際には彼は編者に名を連ねた国語辞書の原稿は1行も書いていない。³⁾

三省堂1943年刊『明解国語辞典』に「文学博士 金田一京助編」と銘打ったのは、^{ひと}独りで完成させた東京帝大院生見坊豪紀^{けんぼうひでとし}の身分より同大教授金田一の看板が恰好良い為である。⁴⁾平成に入ってから、見坊と『新明解国語辞典』(三省堂、72年初版)の生みの親山田忠雄とは辞書界の二大「巨星」と認められ、⁵⁾辞書編纂に関する金田一の自ら意図せぬ「虚声」(事実に基づかない評判)は弾けたが、^{はじ}少しもその偉大さを損なわない「光」と「影」との逆転は国語辞書の重みを浮彫^{うきぼり}にしている。3者を登場させた佐々木健一著『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』(文藝春秋、2014年)では、編纂方針や人生の流儀等の比較を通じて見坊・山田の相生・相剋が活写されているが、日本の国語辞書の相互参照と共に日・中の国語辞書を見比べれば異次元の発見が出来よう。

「金漿」と「泥漿」:「金字招牌(看板)」からの連想

『新明解国語辞典』初版の表紙には出版者名が出ておらず、書名(横書き、2行に分ける)の下に、上から「金田一京助」「金田一春彦」「見坊豪紀」「柴田 武」「山田忠雄」の順で編者名が並べてある。恒例の名義貸しで登場した金田一京助の名は当然の如く衆人を君臨する位置に在り、金色で統一された表紙の文字の中で「金・一」を含む頂上のこの1行は、中国流で言えば文字通りの「金字招牌」(金字の看板)である。修飾語は『日本国語大辞典』の「きん-じ【金字】」の通り、中国語由来(出典は「南史-何敬容伝」)で両言語共通の「《名》金色の文字。金泥(きんでい)で書いた文字」の意である(見出し語が「きん-いろ」と為る同項の最後に異読「こんじ」の附記も有る)が、「金字招牌」は中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』第6版([北京]商務印書館、2012年)で、「商店用金粉塗字の招牌、用來顯示商店資本雄厚、信譽卓著。比喻向人炫耀的名義或称号」(商店の資本が潤沢で信用・名声が抜群であることを顯示する為に、金粉を施した商店の看板。人にひけらかす名義或いは称号を譬えて言う)と説明されている。

両辞書の「金字」の定義で^{それぞれ}其々用いた「金粉」「金泥」は『現代漢語詞典』では項目が無いが、『広辞苑』では其々「金の粉末、または金色の合金の粉末。蒔絵などに使用」「膠をといた水に金粉をまぜたもの。書画を書くのに用いる。こんでい。“紺紙—”と言う項目が有る(文中の“”は原文では「」であるが、引用符「」と区別する為に中国語の「引号」[引用符]を使用した)。『日本国語大辞典』の「きん-ぶん【金粉】《名》」は上記に当る①の他に「②花粉の形容」の意も有り、其々漢籍「景審-題所書黃庭經詩」「李白-酬殷明佐見贈五雲裘歌」の典拠が引いてある。漢籍「東觀漢記」の典拠が付く「きん-でい【金泥】」の語釈は更に詳しく、「《名》金の粉末を膠水(こうすい)で溶いて顔料としたもの。日本画や写経、また仏像の表面を裝飾

するのに用いる。金漿（きんしょう）」と為っている。「きん-しょう【金漿】」の「(名)①“きんでい（金泥）”に同じ」は漢・和とも使用例が無く、「②仙薬の名。黄金を朱草で溶かしたものである」というのは和文使用例のみ付してあるが、同じく自国最大規模の国語辞典と為る『漢語大辞典』（羅竹風主編，全13巻，[上海]漢語大辞典出版社，1986—94年刊）の【金漿】（同辞書の方針で表記されない発音はjīnjiāng）では、「②仙薬名」に『漢武故事』（著者に就いて諸説が有り，漢代の班固の名に託した魏晋の人の作とされる）等3点の典拠が挙げられている。①は「酒名」（酒の名。典拠＝「漢枚乘《忘憂館柳賦》」[時代・人名・地名等の固有名詞に付く下線，及び書名・作品名を表す符号《》[名称＝「書名号」]は原文の儘]等3点)なので，『広辞苑』にも『現代漢語詞典』にも無い「金漿」の上記①は②とは逆に和製語義である。酒や仙薬の名に言う由緒有る中国語で金泥に美称を付けたのは日本語の優雅な感覚と言えるが，「金泥・金漿」の「泥・漿」で組み合わせられた単語の有無には両言語の性格の一端が窺える。

『現代漢語詞典』で採録されている「【泥漿】nǐjiāng」は、「名」粘土和水混合成的半流体，通常指泥土和水混合成的半流体」（(名)粘土と水とで混ぜた半流動体。通常，泥と水とで混ぜた半流動体を指す）の意である。『漢語大辞典』の項目（語釈「泥土和水混合成的半流体」のみ）の挙例（2点）の初出は，「《二十年目睹之怪現狀》第九三回」なので現代の夜明け前に使われた事が確認されている。同辞書では『日本国語大辞典』第1版（再版では改善）と同じく出典の年代を記さないが，件の「晩清（清末）四大譴責（政治・世相批判）小説」の1つは呉沃堯（呉趺人）著，現代史の起点「五・四運動」（1919年）の前の03—05年に雑誌『新小説』に連載され，06—10年に[上海]広智書局より刊行されたものである。題名が日本語で原文の儘と為るのは「目睹」と「之」（連体格助詞）の共有に由るが，『広辞苑』の「もく-と【目睹】」「（“睹”は見る意）実際に見ること。目撃」は，『現代漢語詞典』の「【目睹】mùdǔ」の「動」親眼看到：耳聞～」（(動)自分の目で見ること。「自分の耳で聞き，自分の目で見ること」と一緒である。『日本国語大辞典』の【目睹・目観】の項目の語釈も，同義の「(名)肉眼で見ること。自分の目で見ること。目撃」であるが，同形・同義語の品詞規定の違いは両国の辞書乃至両言語の発想の大きな相異を感じさせる。

動詞か名詞か：「目撃」の品詞に見る日・中辞典の物の見方

使用例「*正法眼蔵（1231—53）仏性“これらみな見仏性なり，眼見目観にならふべし” *米欧回覧実記（1877）一・二“礦業興らざる時代を目睹せば，憐むべきの生意ならん” *文芸上の自然主義（1908）[島崎抱月]七“[前略]近代文芸の活きた事実を目睹するもの〔下略〕”」では，中世の「目観」から現代の「目睹」への移行が先ず目に付く。『漢語大辞典』の「目睹」の項目（語釈「親眼看到」の前に「亦作“目観”」[亦“目観”に作る]と有る）では，『日本国

『日本国語大辞典』で欠落している漢籍典拠は4点有るが、同じ様に最初の「《後漢書・劉根伝》」等2点では「覩」、3点目「清紀昀《閱微草堂筆記・灤陽消夏録五》」以下では「睹」を使う様に為っている。『日本国語大辞典』では現代の2点の表記は見出し語の1番に出ているが、この2点では動詞として用いられているのに品詞は名詞で「(一する)」の附注も無い。

上記語釈中の「もくげき【目撃】」の項目も、「(名)直接、目で見ること。目睹(もくと)」と名詞扱いであるが、「*日本後紀-延暦二三年(804)正月癸未“三論法相両宗菩薩、目撃相諍”」を初めとする使用例の中で、最後の「*東京灰燼記(1923)〈大曲駒村〉四“T氏の目撃した処を語るがままに茲に記して見る”」も含めて、品詞規定とは裏腹に動詞の場合が6点中の5点をも占めている。『漢語大詞典』の【目撃】の「①目光触及；熟視。②猶目睹。親眼看見」(①視線が届く。熟視[する]。②目睹に同じ。自分の目で見ると)には、其々「《後漢書・邳惲伝》」等3点、「唐杜甫《最能行》」等4点の出处が有る。『日本国語大辞典』に漢籍典拠が無くても中国語の影響を受けずに出来たとは限らないが、使い方が中国語と余り違わないだけに『現代漢語詞典』の動詞扱いとの相違が目立つ。一方、後者の「【目撃】 mùjī」の語釈は同辞書の「目睹」と同じ「親眼看到」で、用例は「~者 | ~其事」(「目撃者」「その事を目撃する」)である。『広辞苑』の同項目(語釈=「事件や出来事をその場で実際に、はっきり見ること。目睹^{めく}」)では、「“盗みを一する”“一者”」の2例中で動詞の方に次ぐ連体形は『現代漢語詞典』と共有するが、「目撃者」の「者」は「目睹」の「睹」の「字素」(文字の構成要素)なので余計に面白い(「字素」は和製漢語「語素」[造語要素、即ち単語を構成する最小の意味単位]を振った造語)。

『日本国語大辞典』の「もくげき-しゃ【目撃者】」の語釈は、「(名)ある事柄が起こるのを、実際にその場において見た人」で、使用例(2点)の初出は「*英和商業新辞彙(1904)〈田中・中川・伊丹〉“Eye-Witness 見証人 目撃者”」である。この語は『漢語大詞典』では採録されていないので和製漢語と考えられるが、「目撃」と共に訳語を構成する「けん-しょう【見証】」は同辞書で、「(名)①碁、すごろく、けまりなどの勝負を判定するため第三者が立ち合うこと。けんぞ。けんじょ。②そばにいて、事のなりゆきを見ること。また、その人。見物。見物の場にもいう。けんじょ。③仏語。真の仏性を見きわめること。すでにさとっている自己を知ること」の多義で、其々2点、1点、3点の使用例が有る①~③の成立は12世紀前半~13世紀前半に集中している(「今昔[1120頃か]一六・三七」→「玉葉-承安四年[1174]三月二九日」→「正法眼蔵[1231-53]夢中説夢」)。『漢語大詞典』の【見証】の「①証明；証拠。②親眼目睹可以作証。亦指見証人」(①証明。証拠。②自分の目で見、証人に成れる。亦目撃者・証人を指す)には、「《淮南子・繆称訓》」等3点、「《京本通俗小説・碾玉観音》」等3点の出处が其々有る。成立が遅い後者でも宋代に現れているので、漢籍典拠の無い類義の上記②は和製語義であるとは言い切れないが、日本語で独自に生れた意味だとすれば両国の漢字文化の発想の通底

も感じ取れる。

変容と盛衰：「見証」に見る両言語の隔たり

『広辞苑』の「けん-しょう【見証】」の項目は第4版(1991年)では「⇒けんぞ」の説明の下に、「著聞一―鞠…民部卿―せられて、これほどの事になりぬれば、ともかくもいふべき事にあらずとぞいはれける」と有る(引用中の…及び後出の『日本国語大辞典』の使用例中の〈略〉は原文の儘。本稿筆者に由る引用中の省略は前出の〔下略〕や〔前略〕〔中略〕等で表記する)が、第5版から「けん-ぞ【見証】」の空見出し(説明は「⇒けんぞ」と成っている。専ら「見証①」の意の本見出しの語釈は、「囲碁・蹴鞠^{から}・双六^{から}などを側で見て、勝負を判定すること。審判。けんじょ。けそう。けんしょう」で、出典「源竹河“碁打ち給ふとて…侍従の君一し給ふとて”」も添えてあるが、唯一保存されている古い和製語義は現代に生きている様な用例が無い。囲碁の公式棋戦で裁定役を務める「立会人」なら「たち-あい【立会・立合】」の子見出しとして有るが、和製漢語「見証人」は「見証」の衰微に伴って『広辞苑』『日本国語大辞典』で外されている。対して『現代漢語詞典』の「【見証】jiànzhèng」は、「①〔動〕當場目睹可以做証。②〔名〕指見証人或可做証的物品(①〔動〕その場で目撃し、由って証明できる。②〔名〕目撃者・証人或いは証拠に成れる物品を指す)の両義を持ち、其々の用例「～人」「他親眼看見的、可以做～◇歴史是最好的～」「(目撃者・証人)「彼は自ら見たので、証人に成り得る」「[比喩的な用法] 歴史は最も有力な証拠である」「◇は比喩的な意に用いる例示を表し、語釈に「比喩～」〈～に譬える〉の明記が無い場合に対応する)は、高い使用頻度と具象・抽象両面の使い方を示している。

『日本国語大辞典』の「けん-ぞ【見証・見所】」の項目は、語釈「(名) (“けんしょう” また“けんじょ”の変化した語か) 囲碁、蹴鞠(けまり)、双六(すごろく)などの勝負を、傍で見ていて判定すること。勝負事をそばで見ること。けんしょう。けんじょ」の他に、「語源説 ケンソウ(見証)の約が濁ったもの。ソウは“証”の漢音〔大言海〕も有る。「枕(10C終)一四三・殿などのおはしまさで後」等3点の使用例とも「けんぞ」と書き、2点目「*源氏(1001-14頃)竹河“御碁のけんそゆるされにけるをやとて”」は、『広辞苑』の「見証」の出典と同じ篇章から採った同じ囲碁関係の別の文である。『広辞苑』第4版の「見証」の使用例は『日本国語大辞典』の2項目には出ていないが、同辞書の「見証」と同じく動詞として使われているのは、『日本国語大辞典』の「見証」の最古の使用例「双六(すごろく)を打合けり。〈略〉傍に見証(けんしょう)する者共」と通じる。動詞「見証」と相関する「双六を打合けり」「碁打ち給ふ」は共に「打つ」を含んでいるが、同辞書の【目撃】の名詞扱いが中国語の感覚で訝れるのは「打・撃」の能動性と乖離する点も有る。「見所」は中国語では

読みの違い(「所」は suǒ, 「証」は zhèng) から併記は有り得ないが、この和製漢語の訓読「みどころ」の意味に因んで言えば、源流や発音・語義が多岐に渉る日本語の「見証」の変化の^み見^{どころ}所として、先に生れた和製語義は漢籍と同じく動詞の部類に入っていたことや、現代中国語にも有る「目睹・証明」の意を切り離す様に成ったことが挙げられよう。

選好の違い：「耳聞目睹」成語群の有無の示唆

『現代漢語詞典』の「【睹(*観)】dǔ」(*は1955年に國務院文化部[省]・中国文字改革委員会が公布した『第一批異体字整理表』[「第一批」=第1回]所収の異体字)の語釈「看見(目に入る)は、4つの用例が全て慣用句なので動詞が基本と為る属性を明記していない。「耳聞目〜」も次の「有目共〜|熟視無〜|〜物思人」(「目が有れば誰にも見ることが出来る[誰の目にも明らかな様]」「見慣れているのに目に留めていない様。気に懸けるべき事に無関心な様を指す」「残された物を見てそれを残した人を思う」)も、中国語由来の4字熟語が大量に有る日本語には入っていない。「耳聞目睹」(ěr wén-mù dǔ)も同辞書に項目が有る(=「親耳聽見, 親眼看見」[自分の耳で聞き, 自分の目で見る])が、『広辞苑』と同様に単独の項目が無い「耳聞」は『日本国語大辞典』では採録されている。その「じ-ぶん【耳聞】」の語釈「(名)耳で聞くこと。噂に聞くこと。また、耳で聞いて得た知識。→目見(もっけん)」は、『漢語大詞典』の「聽說, 聽到」(噂に聞く。耳で聞く)とは大半が一致するが、日本語の「^{みみがくもん}耳学問」と通じる最後の和製語義は名詞化の所産である点が興味深い。『漢語大詞典』の出処(2点)の初出「清紀昀《閱微草堂筆記・灤陽消夏錄五》」に対して、漢籍典拠「*說苑-政理“耳聞_レ之, 不_レ如_レ目見_レ之。目見_レ之, 不_レ如_レ足踐_レ之”」は、古代の典拠を網羅した心算の『漢語大詞典』よりも遥かに早い前漢の説話集(劉向編)から採っている。使用例「*西国立志編(1870—71)〈中村正直訳〉一二・一“凡そ人, 目見に由りて知識を得ること, 耳聞に比すれば多し” *米欧回覽実記(1877)〈久米邦武〉例言“東京に復命するまで, 日々目撃耳聞せる所を筆記す”」は、其々名詞と動詞で『說苑』の「目見」や「目撃」と呼応・連用するが、後者の中の「目撃耳聞」は両言語の微妙な異同を端的に示す4字熟語の比較の好例に成る。

「もっ-けん【目見】」は語釈「(名)目で見ること。→耳聞」と、使用例2点(「*授業編(1783)九“其土地を目見(モクケン)するにあらでは詩文の趣興も浮みがたきと云は”」及び上記【耳聞】の初出)とから成る。『漢語大詞典』の【目見】(語釈=「親眼看見」)の典拠(「漢王允《論衡・說日》」等4点)の中で、2点目「唐韓愈《故太学博士李君墓志銘》に「耳聞」と「目見」の両方が出ている。【耳聞目見】(語釈=「親耳聽見, 親眼看見」)では「北齊顏之推《顏氏家訓・帰心》」等2点の典拠が有り、同義の「耳聞眼見」「耳聞目撃」(出典=「唐元稹《連昌宮詞》」「明王廷相《慎言・作聖》」)も挙げられている。別項の【耳聞目睹】(説明=「同“耳聞目見”」)「耳

聞目見”に同じ)は、「魯迅《吶喊・一件小事》」等2点の使用例の様に歴史が相対的に浅いが、^{とも}俱に清代の『閱微草堂筆記』が初出とされた「耳聞・目睹」の複合は今や唯一生きている。『広辞苑』で不採録の「目見」は『現代漢語詞典』には「【目見】 mùjiàn」の項目が有り、【目睹】と同じ語釈「**動**親眼看到」に付く用例「耳聞不如〜」(耳聞は目見に如かず)は、【目睹】の「耳聞〜」と共に熟語としての常用度を示しているが、『日本国語大辞典』にはこの一連の4字熟語の項目は悉く無い。『米欧回覧実記』の中の「目撃耳聞」は奇妙にも『漢語大辞典』では項目が有り、「見“目見耳聞”」(「目見耳聞」を見よ)で参照を指示された本見出しには、「宋蘇軾《石鐘山記》」等3点の典拠が有るが、「亦作“目撃耳聞”」(亦「目撃耳聞」に作る)と言うこの熟語は「魯迅《而已集・黃花節的雜感》」が出处である。久米邦武が漢籍の影響で反転成句を作り魯迅が日本語の影響を受けた可能性も考えられるが、日本語で下地乃至实例が有るのに「耳聞目睹」成語群が全て成立(又は定着)できないとは、同形や類義の言葉が数多く有るこの部類でも隔たりが意外と大きいことを物語っている。

「耳目」と「ひく」：同形異義・異読や同読異形・異義の厄介さ

『日本国語大辞典』の「と《語音字素》6者(者)の類」の5文字の項目の中で、「睹」は「都・堵・屠」の後ろと「賭」の前に出ているが、「【睹】[㊦]」(㊦=漢音の略号)の「はっきり見る。見分ける。みる。/睹聞/逆睹、目睹/」は挙例が最も少なく、『広辞苑』と同じく単独の項目が無いこともその未発達を物語っている。1番目の単語は同辞書の「と-ぶん【観聞・睹聞】」の項目では、「(名)見たり聞いたりすること。見聞」と説明されている。漢籍典拠「*漢武帝-詔賢良“此子大夫之所_レ睹聞也”」の中の「睹聞」よりも、使用例「*日本風景論(1894)〈志賀重昂〉四“而かも其の多々存在するも、会々僻隅陬境に在りて輒ち観聞せざるを如何”」の中の「観聞」が、中国語とは逆の日本語の選好を実践するかのように見出し語の先頭に出ている。『漢語大辞典』の「謂親見親聞(自ら見、自ら聞くことを謂う)と言う【睹聞】(dǔwén)の中で、唯一の出典「《漢書・武帝紀》：“朕之不敏，不能遠德，此子大夫之所睹聞也。”」は、篇名や引用文の切り取り方の違いを除いて『日本国語大辞典』と同じであるが、この語は『広辞苑』『現代漢語詞典』での不登載が象徴する様に死蔵と成って久しい。

「睹聞」の類義語「見聞」は『広辞苑』では、「見たり聞いたりすること。また、そうして得た知識・経験。けんもん」と説明されている。『現代漢語詞典』の「【見聞】 jiànwén」の「**名**見到和聽到的事情」(《名》見た事と聞いた事)は、中国語にしては珍しく相応の動詞としての機能が無く名詞の属性・用法のみであるが、用例「〜広 | 増長〜」(「見聞が広い」「見聞を広める」)は、『広辞苑』の用例「一を広める」と字・義で重なる。『日本国語大辞典』の「けん-ぶん【見聞】」も『広辞苑』と同じ動詞的な要素が前面に出て、「(名)見たり聞いたりする

こと。また、そうして得た知識。見たり聞いたりしての評判。みきき。けんもん」と言う。「東帰集 (1364 頃) 次韻酬衡侍者」等 4 点の使用例中の 3 点目「西国立志編 (1870—71) 〈中村正直訳〉五・三一」では、「牛痘の事を見聞するもの寡なからず」と動詞の使い方をしている。漢籍典拠「*鬼谷子-符言“驗_三耳目之所_二見聞_一”」の中の「耳目」と「見聞」は、其々聴覚と視覚が優先する「字順」(和製漢語「語順」に因んだ造語、語句中の文字の順番の意)と為っているが、この非対称の 1 対で前の方に出る両言語共有の「耳目」は意味・用法の違いがやや大きく、動詞と連用する場合に中国語との相異が一層現れて来る様な傾向を思わせる。

『広辞苑』の「じ-もく【耳目】」の説明は、「(ジボクとも) ①耳と目。②聞くことと見ること。③多くの人々の注意・注目。④上の人^{いず}の意を受けて見聞したことを知らせ補佐する者。めつけ」である。③④に付く用例「一をひく」「一を集める」「一となって働く」は両義の常用度を示し、『日本国語大辞典』の同項目の 10 の子見出しには何れも出ている。上記③の前者に当り 50 音順で最後に在る「じもくを惹(ひ)く」の表記が先ず目を引くが、「人の注意をひく。人の目にとつ」を意味するこの慣用句の使用例 (3 点) の中で、初出「恋慕ながし (1898) 〈小栗風葉八〉」の中の「世の耳目(ジモク)を引(ひ)かうとする」に対して、「魔風恋風 (1903) 〈小杉天外〉前・意外・二」では「惹」を使う「他の耳目を惹く」と成り、「大道無門 (1926) 〈里見弴〉隣人・二」でも「人の耳目(ジモク)を惹き易い」と書く。当初の書き方^{いず}に取って代った「惹く」は、「ひ-く【引・退・曳・牽・惹・弾・挽・碾・轆】」の「■ (他カ五 (四)) (引・曳・牽) 4 対象を手元に近づけようと力を加える」の中の「4 (惹) 人を誘う。気持を近寄せるようにさせる」に出ているが、『広辞苑』では見出し語には成らず、唯「ひ-く【引く・曳く・牽く】 (他五)」の「①糸・紐などはしを手で取り出して自分の方へ寄せる」の 11 の語義中の 2 項に併記されている。

「引退」の異同：浮彫にされる中国的な「先軍・官本位」

俱に「(“惹く”とも書く)」という注記が冒頭に有る④⑤の語釈・出典・用例は、其々「心をこちらに向けさせる。関心と呼ぶ。気を持たせる。さそう。万一一“真葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人一・かめやもわが無けなくに”。日葡辞書“ココロヲヒキミル”。“人目を一・く”“気を一・く”「誘いこむ。導き入れる。源松風“かう拙き身に一・かれて山がつのいほりにはじまり給はじ”。“客を一・く”」である。『日本国語大辞典』の■ 4 の語釈の後ろに付く用例「人目をひく」は仮名表記と為り、使用例 (6 点) の初出「万葉 (8C 後) 二・九九 〈久米禅師〉」では「人ぞ引(ひく)」、次の「源氏 (1001—14 頃) 胡蝶」では「君にひかれて」、「大日経義釈延久承保点 (1074)」では「欲貪に牽(ヒカ)れて」、「虎明本狂言・鳴子 (室町末—近世初)」では「ひく」、「たけくらべ (1895—96) 〈樋口一葉〉四」では「客を引(ヒ)く」、「落梅集 (1901)

〈島崎藤村〉七曜のすさび・土曜日の音楽」では「聴衆の同情を牽く」と、「惹」の出番が無い儘「引」「牽」或いは仮名が使われている。挙例・使用例の「人目をひく」「客を引く」は『広辞苑』の④⑤の両義を一体にしているが、④の例に「(惹)」の裏付けが無いのと同工異曲の不一致は「ひとめを引(ひ)く」である。「ひとめ【人目・人眼】」の21番目(最後)のこの子見出しは「様子・態度などが、他人の注意を引く」意で、使用例(3点)の初出「破戒(1906)〈島崎藤村〉一・二」では「人目を引く」と書き、「東京年中行事(1911)〈若月紫蘭〉三月暦」では「人眼(ヒトメ)を引(ヒ)いて」、「竹沢先生と云ふ人(1924—25)〈長与善郎〉竹沢先生の家・一」では「人眼を牽かんとする」と、同じく「惹」ならぬ「引・牽」を使い「目」から見出し語に無い「眼」への変化も有る。

中国語の「引」「退」「曳」「牽」「惹」「彈」「挽」「碾」「轆」は、其々 yǐn、tuì、yè、qiān、rě、tán、wǎn、niǎn、lì と読み同音語が1組も無い。但し、奇異に映る『日本国語大辞典』の見出し語中の併記されたこの9文字は、両言語共通の「引退」「牽引」の2語を構成する点ではその相隣関係に対する理解も持てる。『広辞苑』の「いん-たい【引退】」は語釈「官職・地位から退くこと。また、現役から退くこと」、及び用例“政界から—する”“—興行”とも動詞先行の印象が有るが、『日本国語大辞典』では「(名) 役職、地位から退くこと。また、スポーツなどで現役から退くこと」と名詞扱いである。尤も、使用例(4点)の初出「*臥云日件録抜尤—宝徳二年(1450)八月七日“〔前略〕倦_レ於_レ応世_一、而自甘引退。〔下略〕”」は、漢籍典拠「*銭起—晩婦藍田旧居詩“才微甘引退、応_レ得_レ遂_レ霞棲_一”」の影響を受けており、次の「四河入海(17C前)一九・二」と最後の「金(1926)〈宮嶋資夫〉四」でも、同様に動詞として使われている(「引退する」「引退[インタイ]させる」)。

『現代漢語詞典』の【引退 yǐntuì】の「**動** 辞去官職」(「**動** 官職を辞する)は、『漢語大詞典』の「**②** 辞官, 辞職」(官位[役職]を辞する。辞職する)の意(出典は「晋袁宏《後漢紀・光武帝紀七》」等3点、2点目が上記に同じ「唐銭起《晩婦藍田旧居》詩」)に当り、「**①** 退兵」(兵を退く)と「**③** 猶退避」(「**④** 退避に同じ)の両義(其々「《戦国策・秦策一》」等4点、「唐張鷟《朝野僉載》卷三」等2点が有る)が消えている。**②**の前半の「辞官」が『現代漢語詞典』の唯一の語義と成ったのは、中国的な「官本位」(官職本位。官職及びその権力を人の社会的な地位や能力の物差しとする価値観)を体現している(いくさ)に用いる**①**が最古であることは「先軍」(軍隊・軍事の率先・優先)の傾向を思わせるが、北朝鮮の2代目党・軍首領金^{キム・ジョンイル}正日が1997年に打ち出した「先軍政治」に由来したこの語は、毛沢東が1927年に唱えた「槍桿子里出政權」(鉄砲から政權が生れる)とも一脈相通する。

採集の死角：「退役」の比喩的な語義の欠落の一因

選手や芸能人の場合に用いる「引退」の由来未詳の和製語義との違いは興味津津であるが、選手の引退を言う中国語の「退役」も日本語の同じ単語に無い意味に由って注目に値する。『現代漢語詞典』の「【退役】 tuìyì」は、「**動**①軍人退出現役或服預備期満後停止服役。②某種陳旧的武器不再用於軍備，也指交通工具、設施等不再使用。③指運動員退離專業崗位」(『**動**』①軍人が現役を退く，或いは後備役満期後に服役を停止する。③選手が專業の職務から離れる)の多義と為り，其々用例「～軍人」(退役軍人)、「這種型号的戰鬥機已經～了」(この型の戰鬥機は已に退役している)、「今年球隊主力隊員大半～，實力明顯下降」(今年，[球技の]選手団は主力選手が大半引退し，實力が明らかに落ちている)が有る。対して『広辞苑』の「たい-えき【退役】」は、「①軍人が兵役を退くこと。陸海軍の将校・准士官が，後備役の期間が終わったとき，また不治の傷病などの場合，退役とした。②機器が長期間使用された後，活動の現場から離れること。その働きを褒め惜しむ思いで言う語」である。

『日本国語大辞典』では「(《名》軍の将校、准士官が後備役満期になり，または，傷痕、疾病などのため軍務にたえなくなって兵役を退くこと。また，その人)の1義で，使用例「*陸軍将校分限令(明治二一年)(1888)七条“退役とは後備満期に至りたる者又は傷痕疾病の爲め(略)現役又は後備を退きたる者を云ふ” *病室の花(1920)〈寺田寅彦〉“退役軍人の父と，夫の忘れ形見で，当時十四位であった娘のヒルデガルトと二人で淋しく暮して居た”」は，『現代漢語詞典』の①の語釈・用例と其々重なる。『漢語大詞典』の「①脱離服役；終止某項工作」(①服役から離脱する。ある仕事を終了する)の出処は，最初の「清張岱《西湖夢尋・瑪瑙寺》：“森羅殿前免刑戮，惡鬼爭奪齊退役。”」と次の「《人民日報》1984.2.4」の記事の後に，「特指義務兵役期満退伍」(特に義務兵の服役満期に伴う兵役を退くことを指す)の説明と，20世紀後半の「秦牧《花城・在仙人掌叢生的地方》」等2点の引用が有る。「②比喻產品因陳旧過時而被淘汰」(②製品が古くて時代遅れに成った為に淘汰されることを譬えて言う)も，『人民日報』83年11月29日の記事を初出とする2点が挙げられているので，『現代漢語詞典』の両義とも中国語から借用した自覚が無いこの語の和製語義に由来したわけである。

『広辞苑』の現行版で追加された②が『日本国語大辞典』の語義に加わっていないのは，後者の圧倒的に大きい規模と21世紀初頭に当る最新版の刊行時期を考えれば不思議である。世相を接写した新聞・雑誌からの採集が特に戦後に関して少ないことも一因と思われるが，明治を中心に『明六雑誌』『風俗画報』『東京朝日新聞』等の登場が有るだけに奇妙に思う。戦後の文献が略書籍や文芸作品等に限定されている処からその死角の深層を掘り下げると，『新明解国語辞典』各版の【読書】の語釈に垣間見られる雑誌類への軽視が思い浮かぶ。初版の「*どくしょ①①【読書】→する」の項目(*は重要語を示し，①①は声調記号)では，「[研究調査のためや興味本位ではなく]教養のために書物を読むこと。[寝転がって読んだり，雑誌・週刊誌を読むことは含まれない]」と，読書を教養の為に限定した上で適用範囲から雑誌・週刊誌を一律

除外している。故「元祖」山田忠雄が編纂に関っていない最初の版（第6版，2005年）では、山田流の個人的な語釈の独善的な部分を薄めようとした編者陣の意気込み⁶⁾とは裏腹に、第5版（1997年）を踏襲した説明は姿勢・場所や目的・種類に強く拘る高適さと独断を以て、「〔研究調査や受験勉強の時などと違って〕一時（^{いとき}）現実の世界を離れ、精神を未知の世界に遊ばせたり 人生観を確固不動のものたらしめたり するために、（時間の束縛を受けること無く）本を読むこと。〔寝ころがって漫画本を見たり 電車の中で週刊誌を読んだりすることは、勝義の読書には含まれない〕」と説く（「読んだり」の後ろに下記の第4版と同様に半字分の空きがあった方が理に適うが、^{ぎょう}行の最後に来ている為か次の行の冒頭の「する」との間に空きは無い）。

「勝義の読書」：仏教語の影響の濃淡の差

山田忠雄逝去の翌年に出た第5版のこの語釈は第4版（1989年）に骨格が出来ており、存命中に刊行を見届けた最後の版ではこの項目は声調・説明とも改訂され次の様に成った。「とくしょ①①【読書】—する〔研究調査や受験勉強の時などと違って〕想（^む）を思いきり浮世（^{うゐ}）の外に馳（^は）せ 精神を未知の世界に遊ばせたり 人生観を確固不動のものたらしめたり するために、時間の束縛を受けること無く 本を読むこと。〔寝ころがって漫画本を見たり 電車の中で週刊誌を読んだりすることは、勝義の読書には含まれない〕“一家①・一力③：一百遍”〔古くは、“とくしょ”〕①型声調（4拍語では「低高高高」）の削除に由って当初の併記の非規範性が浮彫にされたが、『日本語大辞典』の声調表記は第1版、第2版とも「〈標ア〉^{アクセント}㊦㊦〈京ア〉①」である（標準声調では□の中の片仮名はその音節が高いことを表し、㊦は第1拍が低く第2拍から最後まで高いことを表すが、現代京都声調では㊦は最後の拍だけ高くそれ以外は低いことを表す）ので、『新明解国語辞典』第3版までの㊦は標準語の異読に合致し京都語音の「低→高」とも通じる。「想を思いきり浮世の外に馳せ」は再改訂後の「一時現実の世界を離れ」と比べれば、孤高な山田節らしく桃源郷に憧れる文人の現実離脱の願望や自己陶醉の浮遊感が漂っている。第5版と違って括弧（）が付いていない「時間の束縛を受けること無く」と次の文の間に、「馳せ」及び4カ所の「たり/だり」の後ろと同じ半字分の空きが有る。第3版～現行版のこの体裁も句読点を付けない漢文を彷彿とさせて古風の印象を与えるが、2組の「～たり、～たり/だりする」を始め初期に対する改善・工夫が幾つか見られる。

初版から第2版（1974年）の「～読んだり、～読むこと」の件は、表記や初歩的な文法の自動点検の機能が付く個人専用^{パーソナル・コンピューター}電 脳に入力すると、疑問視を表す波線が直ちに下に付いて了^{しま}うが、修正後の2カ所の「～たり、～たり/だりする」は非の打^{うち}処^{どころ}が無い。或いは、雑誌とその発行形態の1種である週刊誌との併記を止めて週刊誌だけを取り上げることで、1992年7月号及び翌年3月号に作家赤瀬川原平の論説「フシギなフシギな辞書の世界」を掲載し、^{いちはや}逸早くこ

の辞書の魅力を世の中に紹介した『文藝春秋』の様な真面目な雑誌に対して、「低俗」の形象が付き纏い易い週刊誌と同列視しない配慮を暗黙に施している。*と*の印を付けた重要語の数が初版の約5700語、第2版の5239語から激減した(第3版は3439語、第4、第5版は3433語、第6版は3439語、現行版は3434語)結果、初版の当該頁(796頁)に有る*付きの「どくさい①【独裁】→する」「どくじ①①【独自】→する」「とくしゅ①①【特殊】→する」「どくしょ①①【読書】→する」「とくしよく①【特色】」の5語の中で、負の意味の【独裁】と共に【読書】は第3版から消えている。刊行時に独裁体制の国家でもないのに「独裁」が重要語にされた必然性は抑々分らないが、【読書】の場合の割愛は活字離れが進んだ社会状況の変化に連動する対応として理解できる。

特殊な書き方で独自の特徴を醸し出して来た同辞書の進化版のこの語釈は一方では、寝転がって週刊誌を読んだり電車で漫画本を読んだりするなら可いのかという疑問を残すが、基準と為る「勝義の読書」の修飾語の小難しくて大仰な語感にも引っ掛かりを感じる。「しょうぎ①【勝義】」の語釈は初版では「〔転義やひゆ的用法でなく〕その言葉の持つ、本質的な意味・用法」で、第6版ではその前に新たに書き添えられた「〔仏教で、最高の真理の意〕」も有る。『日本国語大辞典』では「①〔仏〕最高の真実。第一義。②ことばの本質的な意味」と両義に分け、『漢語大辞典』でも「(名)①(梵 pramārtha の訳語) 仏語。最勝真実の道理のことで、諸法実相・真如・涅槃などをいう。②ことばの持つ本質的な意味・用法」と為っている。①には「舍利讃歌(794—864)」等3点の使用例が付いているが、②は語釈のみなので出処未詳の儘である。『漢語大辞典』の【勝義】(shèngyì)の「①佛教語。指一切事物当体即空的第一義諦。②泛指深妙的義理(①仏教用語。全ての事物の正体は即ち空であることを指す第一義諦。②広く一般に、奥深い義理を指す)には、其々「唐劉禹錫《袁州萍鄉梟楊岐山故広禪師碑》」「章炳麟《国家論》」を初めとする各2点の出処が有る。劉禹錫の生・没は『舍利讃歌』の成立・完成より其々22年早いので、①と①の初出時期は近いと思われるが、『日本国語大辞典』に漢籍典拠が無いのは仏語由来につき目を配らなかつた故であろうか。仏語から派生した独自の②も含めてこの語は中国語では何時からか蒸発しており、『現代漢語詞典』では「勝」の23の子見出しには「勝義」は入っていない。『広辞苑』の「勝義」の前の項目が【娼妓】(=「遊女。特に、公認された売春婦。公娼」)で、次の項が同じく同音の【証義】(=「〔仏〕経典翻訳のとき、訳語の正・不正を判別する役。②論議の時、問者・講者の問答の可否を判定する役。証義者。証誠(はつじやう)者」)であるが、『現代漢語詞典』には中国語固有の「娼妓」chāngjī)は有り(=「名娼妓」)、仏教との距離感を現すかの様に『漢語大辞典』にも無い和製漢語「証義」(中国語読み=zhèngyì)は無い。

『新明解国語辞典』現行版では件の「勝義」は「明解」に相応しく「本来」に直されたが、「読書」の本義を厳格に規定し不適切と考える方式・内容を排除する主旨は変わっていない。この辞

書の個性は赤瀬川原平の『新解さんの謎』（文藝春秋、1996年）で擬人化されたが、「新解さん」（山田忠雄とその流儀）の捻った独り言は正統な辞書の非常識とも言うべきか、『広辞苑』の「どく-しょ【読書】」は「(トクショとも) 書物を読むこと」は無難であり、『日本国語大辞典』でも「(名) (古くは“とくしょ”とも)」の説明に次ぐ①は同じ語積である。「性霊集-五 (835頃) 為橋学生与本国使啓」等7点の使用例と漢籍「礼記-玉藻」の典拠が有るこの語義の次は、「②平安時代以降、皇子または貴人の男児誕生後七日の間、産湯の儀に、湯殿の外で漢籍を読むこと。明経・紀伝の博士が交替で当たり、『孝経』『史記』『礼記』などのめでたい一部を読み上げること。読書の儀。③“どくしょ(読書)の博士”に同じ」である(子見出し【どくしょの博士 [はかせ]】の語積=「禁中で、皇子などの誕生の時、お湯殿の儀に侍して漢籍のめでたい文章を読む紀伝・明経の博士。ふみよむ博士。読書」。猶、『広辞苑』ではこの子見出しは古代の由来を重視する為か「とく-しょ【読書】」の項目内に在る)。②の使用例(2点)の初出「西宮記(969頃)一一・皇后養産」は同辞書初版刊行の約千年前に当るが、昔の日本に於ける漢籍の影響の強さと共に昨今の日本語の「読書」の単純さが感じられる。

読書の三到：心・眼・口総動員の中国流と日本の受容

『現代漢語詞典』の「【読書】 dú//shū」(2本の斜線は2字の間に他の成分の挿入可能を表す)は、「**動**① 看着書本、出声地或不出声地读。② 指学习功课。③ 指上学」(《動》① 本を見ながら、声を出して或いは声を出さずに読む。② 学業の勉強をすることを指す。③ 学校に通うことを指す)の多義であり、其々用例「～声 | ～筆記 | 読了一遍書」(「本を朗読する声」「読書筆記」「本を一通り読んだ」)、「他～很用功」(彼は学業の勉強にととても熱心だ)、「媽媽去世那年、我還在～ | 他在那个中学读过一年书」(「母が亡くなった年には、私はまだ学校に通っていた」「彼はその中学校に1年間在籍したことが有る」)が付いている。【読(讀)】の「**動**① 看着文字念出声。② **動** 阅读；看(文章)。③ **動** 指上学。④ (字的) 念法；读音」(① 《動》 文字を見て声に出して読む。② 《動》 閲覧する。[文章を] 読む。③ 《動》 通学することを指す。④ [字の] 読み方。発音)の①②は、其々『広辞苑』の「よ-む【読む・詠む】(他五)」の「② 文章・詩歌・経文などを、一字ずつ声を立てて唱える」「④ 文字・文章を見て、意味をといて行く」と対応する。『現代漢語詞典』の「読書①」の声に出すか否かの2つの場合とも通じて朗読の方が先に出るが、②には用例が無く④には「古典を一・む」が有るので黙読の優位が見て取れる。

教育学者齋藤孝著『声に出して読みたい日本語』(草思社、全5巻、2001年)が契機で、ミレニアム初頭の日本では文章の音読に由って国語力や教養を高めようとする流行が起きた。250万部に上る発売部数は日本語教育や読書法の革命的な主張の新鮮さを物語っているが、中国では「読書」の音読本位は数千年の歴史が有り国語教育の基本中の基本を為して来た。『身体感

覚を取り戻す『腰・ハラ文化の再生』(NHK ブックス, 2000年)の題名の通り、齋藤(当時明治大学文学部助教授)は^{からだ}躰を基盤とした心・技・体の総動員を唱えているが、『広辞苑』の【読書】の子見出し「-さんとう【読書三到】」には中国の伝統が見られる。「[朱熹訓学齋規] 読書の法は心到・眼到・口到にあるということ。すなわち、本を読むときは心・眼・口をその本に集中し、熟読すれば内容がよくわかることをいう。」これを1番目とする5つの子見出しの次に有る唯一の慣用句【読書百遍義自^{おのずか}ら見^ある】は、「[三国志魏志、王肅伝、注] どんなに難しい書でもくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる。熟読の必要を説いた言葉。“読書百遍意自^{おのずか}ら通^す”とも」である。「じゅく-どく【熟読】」の項目は「文章の意味をよく考えてじっくりと読むこと。“マニュアルを一^する”」で、子見出し「-が^んみ【熟読玩味】」は「じっくりと味わって読むこと」の意味であるが、昔の中国の国語教育では意味の理解を問わず学童に詩文を朗読・暗記させる手法が多かった。「読書百遍義自見」「読書百遍意自通」の理念に由る強制的な熟読は暗記を目指す朗読の反復に他ならず、【読書】の①の最初の用例「~声」は正に「初めに声音有りき」の音読練習の風景の一部であり、②③の「学業の勉強をする」「学校に通う」意も中国式の学習・教育の源流に沿っている。

『日本国語大辞典』の【読書】の最後(4点目)の子見出し【どくしょ 百遍(ひゃっぺん) = 義(ぎ) 自(おのずか)ら見(あらわ)る [= 意(い) 自(おのずか)ら通(つう)ず】)では、「(魏志-王肅)の注に引く『魏略』の“人有^二從学者^一、遇不^二肯教^一而云、必当^二先読百遍^一、言^二読書百遍而義自見^一”による)」と漢籍典拠を引いている。使用例が無いことは中国の古典への尊重と日本で未発達を印象付けているが、『新明解国語辞典』第4版の【読書】の用例中の新設した「一百遍」は第6版で拡充されて、音読先行の教学法の勃興を先取りするかの様に「一百遍^キ自^{カラ}ら見^ヲる」に成った。一方、【どくしょの儀(ぎ)】(=「どくしょ(読書)②」に同じ)に次ぐ2点目【どくしょの三到(さんとう)】では、使用例「*書言字考節用集(1717)一〇“読書三到 dokusho santau 眼。口。心。”」が有るが、参照を指示した同義の「【読書三到】(名)」の項目では使用例・漢籍典拠とも無い。「【三到】(名)」の項目では使用例「譬喩尽(1786)六“三到(タウ)読書、眼到 口到 心到」と共に、漢籍典拠「*朱熹文-訓学齋規“余謂読書有^二三到^一、謂^二心到・眼到・口到^一(略)心到最急、心既到矣、眼口豈不^レ到乎”」も有る。^か彼の南宋の大儒(1130-1200)の死後50年余り経って日本に伝来した理念であるが、上記2点の使用例では原典で最重要として1番目に位置した「心」は最後に回されている。

混用と交錯：日本語の「反復・反覆」と中国語の「反复」

『広辞苑』の【三到】の語釈では、朱子の主旨を「心と眼と口とを十分にはたらかせて反覆・

誦読せよ」と要約している。日本の武道等で重視する「心技体」（精神・技術・肉体）と同じく「心」が最初に出るが、3要素併用の熟読は「反覆・誦読せよ」の命令形とも通じる様に精神力の先導が欠かせない。『日本国語大辞典』の【読書三到】の説明は、「書物を読んで真意を悟るには、目でよく見、口で朗読し、心で会得するという、三者専一の熟読に到るべきだということ。読書の三到」と言うが、到達点の会得を心の役割と捉える規定は「心到」を最大の急務とする原義とは乖離する。尤も、『広辞苑』の「いそぐ【急ぐ】」の唯一の子見出しとして急を戒める「急がば回れ」が有り（＝「危険な近道よりも、安全な本道をまわった方が結局早く目的地につく意。成果を急ぐなら、一見迂遠でも着実な方法をとった方がよい」）、中国でも『論語・子路』が初出の「欲速則不達」（速やかならんと欲すれば則ち達せず）が有る（『現代漢語詞典』の「【欲速則不達】 yù sù zé bù dá」＝「過於性急反而不能達到目的」[性急過ぎると却って目的を達成できない]）。この共通の逆説に即して考えれば「最急」を最後に置くのも一理が有るかも知れないし、述語を文末に置き「心」が中国語と違って動詞であり得る日本語の特性を見ても頷けるが、反復・誦読の読書法の実践が弱いのは「心→眼・口」の推進が足りない所為であろうか。

『広辞苑』の【三到】の語釈中の「反覆」は同辞書で、「①元にもどすこと。また、もどること。②裏返しになること。裏返すこと。ひっくり返すこと。③うらぎること。変心して信義を破ること。④くりかえすこと。反復」と説明され、例示は③の「人心一」のみで子見出しも無い。その前に在る同音の「はんぶく【反復】」の項目は、1義の「くりかえすこと。たびたびすること。“一練習”で、子見出し「-きごう【反復記号】」「-せつ【反復説】」「-ほう【反復法】」も有る。何故この文意で規範的な「反復」でなく混同の余地が有る「反覆」を使ったのかは解せないが、『日本国語大辞典』で2語の履歴を比べると同義の「反覆」の成立の早さが思い当たる。【反復】の項目は語釈「〔名〕同じことを繰り返して行なうこと。反覆」と、「清原国賢書写莊子抄（1530）七」等4点の使用例及び漢籍「易経-復卦」の典拠から成るが、【反覆】の項目（〔名〕「はんぶく」とも）の最後の語義「⑤「はんぶく（反復）と同じ」」では、漢籍「孟子-万章・下」の典拠と共に挙げられた使用例（5点）の初出は、上記より700年余り前の「文華秀麗集（813）下・奉和隴頭秋月明〈小野岑守〉」である。最後の「*読書入門（1886）〈文部省〉“教師須知〔中略〕同一の事を再三反覆し、以て記憶力を養ふこと最も必要なり”」と好一對に成る様に、「はんぶく-れんしゅう【反復練習】」（語釈＝「〔名〕あることがらを繰り返し練習したり用いたりして、身につけ、習慣的に反応できるようにすること。ドリル。反復法」）でも、唯一の使用例「文部省令第一号-明治二四年（1891）十一月一七日・一条（法令全書）」の中の表記は「反覆」である。

「反覆」の「①元にもどること。また、元にもどすこと。②うらがえしになること。ひっくりかえること。また、うらがえすこと。ひっくりかえすこと。反転。③天下・国家などの体制

が崩壊すること。くつがえること。また、くつがえすこと。転覆。④心変わりして信義を破ること。うらぎること」は、其々漢籍「史記－屈原伝」「漢書－陸賈伝」「戦国策－趙策・武靈王」「詩経－小雅・小明」の典拠が有り、全語義が中国の古語に由来し元と為る①に使用例が無いのは中国語の要素の強さの証である。『現代漢語詞典』の「【反復】 fǎnfù」は「反覆」「反復」の2語を1つに集める形で(本稿では中国語文献の文字は日本語の漢字を使うのが基本と為り、例えば同辞書の【讀 [讀]】を上記の【読 [讀]】に直したが、「反復」は「反復・反覆」に跨るので簡体字「復」の儘にした)、「①副」一遍又一遍；多次重複。②動顛過來倒過去；翻悔。③動(不利的情況) 重新出現。④名重複的情況(①(副) 繰り返して。何回も重複して。②(動) 何度も引っ繰り返す。前言を翻す。③(動) [不利な状況が] 又現れる。④(名) 繰り返される状況)の多義を持つ。其々用例「～思考 | ～実践」(「繰り返し思索する」「繰り返し実践する」)、「～無常 | 説一是一, 説二是二, 決不～」(「ころころ変る」「一と言ったら一, 二と言ったら二, 決しておれない」)、「這種病容易～」(この種の病気は再発し易い)、「鬭争往往会有～」(鬭いは往々にして二転三転し勝ちだ)が付いている。副詞の意を基本とするこの多品詞の単語の②の語釈中の類義語「翻悔」は、「動」対以前允諾の事後悔而不承認(「動」以前承諾した事を後悔して認めない)の意で、用例「這件事原是他親口答应的, 如今却～不認帳了」(この件は彼が自ら承諾したのだが、今は後悔して認めなくなった)も有るが、上記の「反覆④」に当て嵌りながら日本語には無い。逆に「反覆③」の「転覆」は中国語には有るものの「反復」の語義に入らないが、「翻・覆」「反・転」で構成する幾つかの同形語は両言語の違いを考えさせる手掛りに成る。








陰陽の反転：両言語の相克相生の対立・統一の象徴

『日本国語大辞典』の「反復」の前に「はん-ふく【翻覆】」の項目が有り(=「(名)うらがえること。ほんぷく。*漢語字類 [1869] <庄原謙吉> “翻覆 ハンフク ウラガエル”), 「はん-ふく【翻覆】」の項目は語釈が「(名) ひっくりかえすこと。また、表裏がかわること」で、「史記抄 (1477) 一三・樊鄴膝灌伝」等3点の使用例(動詞としての用法が基本)と、漢籍「陸機-君子行」の典拠が挙げられている。『現代漢語詞典』の「【翻覆】 fānfù 動」の諸語義の最後が「④ <書> 反復②」(<書>は「書面語」即ち文章語の略号)で、①は「翻①」(=「動」上下或内外変換位置；歪倒：反転)〔(動) 上下或いは内外の位置が入れ替る。傾いて倒れる。反転する〕、②は「発生巨大而徹底的变化」(大きくて徹底的な変化が起きる)、③は「来回翻動身体」(繰り返して体の向きを変える)の意で、其々用例「車輛～」(車輛が引っ繰り返る)、「天地～」(天地が引っ繰り返る)、「夜間～不成眠」(夜に何回も寝返りを打って眠れなかった)が付いている(「翻①」の用例でも「推～ | ～身」〔推し倒す。打倒する〕「寝返りを打つ/解放

される/苦境から脱出する]]の次に「車～了」[車が引っ繰り返った]が有る。因みに、最後の4点目は「人仰馬～」[人も馬も引っ繰り返る。戦で大敗した狼狽^ぶ振りの形容。又、混乱や忙殺で收拾が付かない様の譬え)。日本語では正統な読みの方は江戸初期にも漢詩の「*艸山集(1674)四・碧翁“縦作_二手翻覆_一、奈_二吾一片心_一”」(3点目)が有り、明治初頭の辞書には中国語読みに近い異読の「翻覆^{はんぷく}」も出たが、『広辞苑』の両方不採録に見る死語化は中国語での意味の発達や使用頻度の高さとは逆であり、日本語の漢字語句と中国語との間の「逆様^{さかさま}」形態や「反転」構造の深層への試掘を誘う。

日本語の「反覆」は『広辞苑』の【三到】の語釈等の様に「反復」と混用できる反面、上記の両辞書では同音及び一部同形・同義であるにも関わらず律儀に別々に立項されている。対して『新明解国語辞典』初版では同一項目中の分項目扱いで、「*はんぷく①_{する} ㊦【反復】何度でも繰り返すこと。“一練習・一記号”㊦【反覆】〔古〕変心して、約束を破ること。“表裏一”〔㊦は、反覆とも書く〕」と為っている。第3版以降は重要語から外されており(同じ924頁の重要語の中で同じ1つ星の「はんぱ ㊦【半端】㊦」「はんびれい 3【反比例】_{する}」も降格し、「はんぶん【半分】」の半減(2つ→1つ)に反比例して「はんのう ㊦_{オウ}【反応】_{する}」は2つ星に昇格し、無印の「はんぱつ ㊦【反発・反(撥)】_{する}」〔くは常用漢字表外の字の直上に付けた符号〕には1つ星付与された)、「始祖離れ」の換骨奪胎が始まった第6版では「始祖脱退(退場)」の胎動と成る第5版の変更を継承して、最後の説明の前に赤字・白抜き[㊦]の【表記】が付けられ、㊦㊦も黒地・白抜きの形に反転している(上記引用中の形式上の変化として、声調符号が初版の①②…から第5版以降の㊦㊦…と成ったことも有る)が、記述の変更は現行版に成って漸く現れた。現行版では「_{する}」の後の「(自他サ)」の追加と共に㊦の見出し語は【反復・反覆】の併記に成った(初版からの「㊦は、“反覆”とも書く)及び第4版以降のその前に添えた【説明】は削除した)が、両義を「反復」の1項目に同居させた『現代漢語詞典』と類似する発想は一貫している。

静かな「辞書熱」を引き起した三浦しをんの小説『舟を編む』(光文社、2011年)には、中型国語辞典『大渡海』の編纂に携る「玄武書房」辞書編集部員と監修の老国語学者との議論の中で、「黒丸に白抜きの数字記号を使うと、数字部分がつぶれてしまって読みにくくないですか」という声が上がっている。⁷⁾ 主人公馬締光也^{まじめみつや}の原型は『広辞苑』の編集者平木靖成^{ひらきやすなり}(岩波書店辞書編集部副部長)である⁸⁾が、第4版刊行の翌々年(1993年)以来辞書作り一筋行って来た平成の主力の時代に成っても、同辞書の語釈中の段階的に用いる語義・用法の分類記号は区分の大きい順で、㊦㊦㊦…→①②③…→①②③…→㊦㊦㊦…の形の儘である。これで「とーる【取る・採る・捕る・執る・撮る】」の②の最後の㊦等2桁の数字が読み易いが、『現代漢語詞典』では『漢語大詞典』等の中国の辞書と同じ黒丸・白抜きが基本と為り、参照指示に於いては他項目中の「義項」(同一の見出しの下に語義によって排列した項目。語義区分)の記号

は白丸・黒抜きに成るのである。『日本国語大辞典』の「凡例」の「語釈について」の中の「二語釈に用いる分類記号」では、…→…→…→…と各段階の例示をしている品詞又は動詞の自・他の別、活用の種類の別等などによって分ける符号は黒枠・白抜きと為るが、『現代漢語詞典』の①②…も数字の読み易さより符号の目立つ度合を優先するものである。中国哲学の祖形「太極図」(俗称「陰陽魚」)も黒地の中の白の模様とその反転とから成るが、黒い字を印刷した白い紙に黒丸・白抜きの符号を用いるのは陰陽思想の所産とも言えよう。「凡例・解説・語釈の区分」の1節で分類記号に就いて説明した『広辞苑』と違って、『現代漢語詞典』の「凡例」にも『新明解国語辞典』の「編集方針・細則」にも相応の記述は無い。『新明解国語辞典』第5版から黒丸・白抜きが主に成った(…→…)のは、旧版の…→①②…とは色の反転によって既成パターンの型と一線を劃した変化とも言えよう。日本の3辞書の各々の様式と『現代漢語詞典』『漢語大詞典』との異同はともかく、何れにも有る分類記号の黑白反転の対立・統一は両言語の相剋・相生と結び付けば面白い。

共通と親近:「復/複姓」の例示が物語る「語縁・文化縁」

中国語の「復」は【翻覆】の「④〈書〉反復②」の様に日本語の「復・覆」を兼ねる処が有るが、同音・同声調(fù)の「覆」とは親項目が別々で混同できない場合が多い。同じ「復」でも其々違う異体(繁体)字が付く【复¹(複)】【复²(復)】の2項目に分け、前者の両義は「重複」と「繁複」(多くて複雑な様)(其々の用例に「~写」[複写]と「~姓」[複姓]が有る[複数有る用例から1つだけ抽出するが、両言語共通か類似の単語を優先する。共通か類義の語が複数有る場合でも無い場合でも、先に出る方か未だ例に挙げていない方を取る。本段落では以下同じ])で、後者は「①転過去或転回来。②回答;答復。③恢復。④報復。⑤再;又。⑥(Fù) [名姓] (①何度も引っ繰り返る。②回答。返事。③恢復。④報復。⑤再び。又。⑥(Fù) (名)姓)の多義で、①~⑤の代表的な用例は「反~」(反復)、「敬~」(敬復)、「光~」(光復)、「報~」(報復)、「死灰~燃」(死灰復燃またゆ)である。2つの親項目の下に¹と²の区別をせず子見出しをピンイン(発音の羅馬字表記)順で並べているが、「反復=反復・反覆」の吸収合併と通じる渾然一体の配置は中国語の大雑把な一面らしい。他方、「覆」は「①蓋住。②底朝上翻過來;歪倒。③滅亡。④同“复”①②」の意で、用例が付く①~③の典型は其々「被~」(被覆)、「顛~」(顛覆)、「~滅」(覆滅)である。

『日本国語大辞典』の【ふく(字音語素)】でも同じ「2復の部」に属するこの3文字は、「【復】漢」は「①いった道をかえる。②もとにもどる。かえる。③しかえし。あだをかえす。④こたえる。⑤くり返す。もう一度」(其々の代表例は「①往復」「②復帰」「③報復」「④復命」「⑤反復」)、「【覆=覆】漢」(漢=慣用音の略号)は「①くつがえる。くつがえす。②くり返す。“復”

に同じ。③かぶせる。おおう。おおい。もと“ふう”“ふ”。“ふく”は慣用(同=「①傾覆」「②反覆」「③覆蓋」),【複】は「①うらのついた着物。②かさねる。二重。単一でない。③ふたたびする」(同=「①複衣」「②複雑」「③復刻」),と別々に為っている。

『現代漢語詞典』の【复¹(複)】②の用例「～姓」は「複②」の22語には入っていないが、『日本国語大辞典』の「ふく-せい【複姓】」の項目では、「(名)①中国で、二字からなる姓をいう。諸葛・欧陽の類。②日本の古代、氏と家を重ねて称したもの。大化改新以後、これによって氏内部の家柄を区別した。阿倍引田・阿倍布勢の類」と詳解され、①には漢籍「通志-氏族略・氏族序」の典拠が引いてある。百科事典の機能を兼ね備えた『広辞苑』の語釈はより詳しく、「①中国で姓が二字から成るもの。司馬・欧陽・諸葛の類。②日本古代の氏の名で、地名・官職名などを重ねて呼んだもの。その一つとして、氏と家とを連称したものがあり、大化改新の前後から大きな氏はこれによって氏内部の家柄を区別した。阿倍引田^{あひひだ}・阿倍普勢^{あひふせ}の類」と為っている。中国語では「布」と「普」は読み(bù, pǔ)が違うので日本語での同音・混用は理解し難いが、両辞書の「布勢」と「普勢」の表記の不一致と共に興味を引くのは①と②の例示である。『現代漢語詞典』の【复姓 fùxìng】の「(名)不止一個字的姓,如欧陽、司馬等」(〔名〕1字以上の姓,欧陽・司馬等の類)では、「唐宋八大家」の内の欧陽修と『史記』の著者司馬遷^{しぼせん}の姓を採っているが、『広辞苑』でこの2種類の他に『日本国語大辞典』に有る「諸葛」も入れられたのは、同じ複姓の魏の軍師司馬懿^いと死闘を繰り広げた蜀^{しよかつりょう}の諸葛亮(孔明)の日本での人気を思わせる。和製漢語「血縁」「地縁」に因んで言えば、此处でも両国の「語縁・文化縁」(言語・文化上の絆を表す造語)が見て取れる。言葉こそ堅く閉ざした心の城府へ通う唯一の小道であったと金田一京助は言い切ったが、「語縁・文化縁」の神通力は言わば血縁・地縁に準じる特殊な連帯感に在ると思われる。

「拼音」と「字母」：中国語の「字模」・日本語の「母型」との連環

『新明解国語詞典』の草創期には山田忠雄^{すで}は已に日本古典文学研究の大家であったが、上記両辞書で丹念に取り上げられた古代日本の事象を含む「複姓」は最初から外されている。百科事典的な役割を持ち合せない小型国語辞書としては当然の切り捨てかも知れないが、①の中国関連と関連付けて考えれば中国への関心の稀薄さや偏向も一因として思い付く。1例として上記の「拼音」は中国が日本に代って世界第2の経済大国に成った(2010年末)後、中国語学習^{ピンイン}熱が起きた中で世に出た最新版では漸く項目が立てられるに至った。その「ピンイン」①〔中国・拼音〕中国語をローマ字によって表音的に表わしたもの」に対して、『広辞苑』の「ピンイン【拼音】」(第4版から立項)の語釈は、「(pinyin)中国語の発音を表記するためのローマ字,またその音。一九五八年に中国で公布された『漢語拼音方案』に基づき、子音と母音とを表す二六
22 (360)

個のローマ字により現代中国語が綴り合わされる」である。第2版で追加された『日本国語大辞典』の同項目(見出し中の「ピン」と「イン」の間に-が有る)は、「(名)(中国語から)中国語のローマ字表記。一九五八年に公布された『漢語拼音方案』に基づき、アルファベットと声調符号とにより、現代中国語(共通語)の読み方を表わす」と為っているが、『現代漢語詞典』の「【拼音】pīnyīn」の項目は両言語の概念・品詞を示す様に、「**動**把兩個或兩個以上の音素合起来成為一個複合的音, 如 b 和 iāo 拼成 biāo (標)」「(動) 2つ或いは2つ以上の音素を合せて1つの複合した発音にする。例えば b と iāo とが biāo [標] に成る)である。中国でも「拼音字母」の略として『広辞苑』の語釈の通りの意で日常的に使われているが、『現代漢語詞典』で名詞の性質を取って併記しないのは動詞中心の姿勢の固さを思わせる。

「【拼音字母】pīnyīn zìmǔ」の②が「指《漢語拼音方案》採用的為漢字注音和拼写普通話語音的二十六個拉丁字母」(『漢語拼音方案』で採用された、漢字の発音を表記し標準語の読みを綴る26のローマ字を指す)の意で、①は「拼音文字所用的字母」(拼音文字で用いる表音文字)を指す。「【字母】zìmǔ」は「**名**①拼音文字或注音符号的最小的書写單位。②音韻学上指声母的代表字, 如“明”代表 m 声母」(『名』①拼音文字[表音文字]或いは表音符号の最小表記單位。②音韻学で、声母を代表する文字を指す。例えば、「明」で m 声母を代表する)の両義で、①に用例「~表 | 拉丁~ | 注音~」(「字母表」「羅馬字」「表音字母」)が有る。『日本国語大辞典』の「**じーぼ**【字母】」は、「(名)①漢字の音の基本となる文字。②かな、梵字(ほんじ)、アルファベットなどの表音文字の一つ一つの字。③(英 matrix の訳語)活字をつくるもととなる字型。母型」の多義で、何れも漢籍典拠が挙げられていないが、①と②に対応する『漢語大詞典』の両義では「①音韻學術語。声母的代表字, 简称“母”」(①音韻学の術語。声母を代表する字, 略称「母」)には、「宋王应麟《玉海·芸文·小学》」等2点の出典が有る。『広辞苑』では「**仮名・梵字・ローマ字など、音を表記する母体となる字**」を①とし、次に「②中国音韻学において一つ一つの声母を表すのに用いる漢字をいう。声母 [k] を表すのに“見” [ken] 見母という類。通常三六の字母を認める。③⇒母型ぼけに同じ」が続く。K 声母の代表格として「見」を挙げるのは jiàn と読む現代中国語との乖離を感じさせるが、『現代漢語詞典』の【明】は míng なので m 声母の典型に適するものである。

③と同義の「**ぼーけい**【母型】」は、「活字の字面を形成する金属製の型。これを活字鑄造機に取り付けて活字を作る。製作法によって、電胎母型(ガラ母型)・彫刻母型(ベントン母型)・打込母型(パンチ母型)の三種がある。字母」の意である。『日本国語大辞典』では、「(名)活字の字面を鑄造するのに用いる雌型の型。製作法により電胎母型・彫刻母型・打込み母型の三種がある。字母」に続いて、「また一般に、複数の物を製作する際に用いる、基となる型」と有る。「とむらい師たち(1966)〈野坂昭如〉“デスマスクの母型をこわきに抱えている”」が唯一の使用例と成るが、5年余り後の『新明解国語辞典』初版の【字母】の両義には「**活字**

のもの型」が入った。㊦は「かな・アルファベット・梵(ボ)字など、発音を示すつづり字の一つ一つ」なので、歴史の古い中国音韻学の術語の意は実用性が低い故か圏外に置かれている。其処で優先された「母型」は中国語に無い和製漢語であるが、『現代漢語詞典』の【字母】の直ぐ前の同音・異声調(第3声)の【字模】は正しく、「**[名]**澆鑄鉛字的模型, 用紫銅或鋅合金制成」(〔名〕活字を鑄造する模型, 紫銅或いは亜鉛合金で作られている)の意である。「字母」は両言語で其々「字模」「母型」と文字、語義又は発音で連環を為しているが、発音符号が字の「母」と為る発想は日本の辞書の見出し語の仮名先行の型を肯定できよう。中国流の漢字先行は「字」のウ冠(中国語=「宝蓋」) + 「子」の字形に因んで言うなら、「親」なる声音の所産でありながら「親」を凌ぐ存在にまで成長した結果とも見て可かろう。「改革・開放元年」(1979)以降の「独りっ子政策」は「小皇帝」世代を生み出して来たが、親の寵愛を一身に集める子供を皮肉って譬えるこの名に似合う様な「宝蓋」(宝の冠)は、「文字」(中国語では「字」「書面形式の言語」「文章」の多義)に対する中国人の重宝を表せる。

「^{ラテン}拉丁・^{モンゴル}羅甸」：両言語共通の「螺鈿」との奇妙な接点

【拼音字母】と同じく品詞の明記が無い『現代漢語詞典』の「【拼音文字】 pīnyīn wénzì」は、「用符号(字母)来表示語音的文字。現代世界各国所用的文字多数は拼音文字, 我国的藏文、蒙文、維吾爾文等也是拼音文字。参看 1551 頁【音素文字】、1551 頁【音節文字】」(符号[字母]に由って語音を表す文字。現代の世界各国で用いられる文字は大半が表音文字で、我が国のチベット、^{チベット}西藏文・^{モンゴル}蒙古文・ウイグル文も表音文字。1551 頁の【音素文字】、1551 頁の【音節文字】を参照せよ)と説明されている。「【音素文字】 yīnsù wénzì」は「一種拼音文字, 它的字母表示語言中的音素, 如英文、俄文」(表音文字の一種, その字母は言語中の音素を表す。英文・^{露シヤ}露文の類)、「【音節文字】 yīnjié wénzì」は「一種拼音文字, 它的字母表示整個音節, 例如梵文和日文的假名」(表音文字の一種, その字母は音節全体を表す。梵文と和文の仮名の類)の意であるが、^{かつ}曾ての両超大国と長年(1968-2010)の世界第2の経済大国の使用言語の登場が興味深い。【拼音字母】の語釈と【字母】の用例に有る「拉丁字母」(Lādīng zìmǔ)の項目では、使用人口の多い「大語種」(主要語種)を重視しつつ均衡を取る様に他の国連公用語も取り上げられ、「拉丁文(古代羅馬人所用文字)的字母。一般泛指根拠拉丁文字母加以補充的字母, 如英文、法文、西班牙文的字母。《漢語拼音方案》也採用拉丁字母。[拉丁, 英 Latin]」(拉丁文[古代^{ローマ}羅馬人が使用した文字]の字母。一般に広く, 拉丁文の字母に基づいて補充した字母[例えば英文・^{スベイン}仏文・^{スベイン}西班牙文の字母]を指す。『漢語拼音方案』でも拉丁字母を採用している。[拉丁, 英 Latin])と述べている。

『広辞苑』の「字母①」で仮名・梵字と共に例示された^{羅馬}ローマ字も表音文字であるが、「拼音」

の日本流の語釈で用いられたこの概念と中国流の「拉丁字母」との違いも目を引く。「ラテン【Latin・羅甸・拉丁】」の項目(=「ラテン語 [の]。ラテン系の人 [の]」)の様に、日本語にも「拉丁」と表記する場合があるものの主流ではあるまい。『日本国語大辞典』の「ラテン【羅甸・拉丁】」では「(《名》^(ポルトガル) Latin) (ラチン・ラティン) ①“ラテンご (一語)”の略。②“ラテンおんがく (一音楽)”の略。③他の語と複合して、ラテン系、ラテン民族の意を表わす。“ラテンアメリカ”“ラテン音楽”などの多義に成るが、使用例が付く①の3点中に漢字表記を用いた2点目「西国立志編 (1870—71)〈中村正直訳〉八・二三」では「拉丁 (ラテン)」、次の「当世書生気質 (1885—86)〈坪内逍遙〉五」では「羅甸 (ラテン)」と書く。「ラテン—ご【一語】」の項目でも漢字表記を用いた2点目 (上に同じ) では「拉丁 (ラテン) 語」、次 (最後) の「星座 (1922)〈有島武郎〉」では「羅典 (ラテン) 語」と書く。歴史が浅く使用例も少ない「羅甸」が「拉丁」の前に出るのは基準への疑念を涌かせるが、『新明解国語辞典』初版の「ラテン①【Latin = ラテン語】【拉丁・羅甸は、音訳】」は、上記両辞書とは逆の順番で個性を現しており図らずも中国語の常識に近い。

『現代漢語詞典』に無い『漢語大詞典』の【羅甸】の項目の両義中の地名は、「②古国名。地当在今貴州省中部」(②古の国の名。今の貴州省中部に在ったと推断できる)の意で(中国語では地名は国家・個人・機構・書籍・語種等の固有名詞と同じく、^{ピンイン}拼音の冒頭の字母は大文字に成るのが規則である。『現代漢語詞典』の親項目の語釈中の姓氏は大文字で始まる^{ピンイン}拼音を括弧付きで特記しているが、此处で相応の扱いをしていない『漢語大詞典』はやはり雑であると言わざるを得ない)、「明田汝成《炎徼紀聞・奢香》」の典拠が付いている。①は「即螺鈿。又称螺甸。我国一種傳統手工艺术品，用貝殼或螺蛳殼薄片鑲嵌在木器、漆器表面，做成有彩色光沢的花紋或図形」(即ち螺鈿。又「螺甸」とも称す。我が国の伝統的の手工芸の一種、貝殼或田螺^{たにし}の殼の薄片を木器・漆器の表面に貼り付け又は嵌め込み、彩色の光沢が有る文様或いは図柄に仕上げる)の意で、「崔左夫《錢塘風雨》」の出処の後に「參見“螺鈿”」(「螺鈿」を参照せよ)の指示も有る。『現代漢語詞典』では同音・同声調・同義の「【螺鈿】luódiàn」は、「名一種手工艺术品，螺殼或貝殼鑲嵌在漆器、硬木家具或彫鏤器物的表面，做成有天然彩色光沢的花紋、図形。也作螺甸」(《名》手工艺术品の一種。卷貝^{から}の殼或いは貝殼を漆器・堅木製家具或いは透かし彫りの器具の表面に貼り付け、又は嵌め込み、天然の色彩・光沢が有る模様・図形に仕上げる。「螺甸」にも作る)と紹介されている。併記の無い「羅甸」は上記出処が20世紀後半の作品なので未定着の異体と考えられるが、この意味が無い日本語では「拉丁」と共に「ラテン」の当て字と成り、上記3辞書^{とも}で俱に【ラテン】の次の項目が【螺鈿】であることは、漢字を用いる日本語ならではの内・外(対中国語)の「語縁」の面白い例に挙げられる。

「螺鈿・夜光貝」：^{まなざし} 技芸や生物に優しい日本の辞書の眼指

『広辞苑』の「らーでん【螺鈿】」の語釈は手工芸が得意な国柄を反映して、「夜光貝・鮑貝あわびなどの貝殻を板状に成形し、文様に切って木地・漆地の面にはめ込み、または貼り付け、漆を塗り研ぎ出す技法。中国唐代に盛行し、日本にも伝えられ、とくに平安時代以降に多様な発展を遂げる。一般に厚貝を用いたものを螺鈿、薄貝を用いたものを青貝という。また貝殻で飾ることを貝摺せりともいう」と【母型】の説明以上にきめこま肌理細かい。「母型」の基本語義の説明が『広辞苑』より簡略な『日本国語大辞典』はこの項目では、語釈「(名) (古くは“ラテン”) 漆工芸の一技芸。夜光貝・あわび貝など、真珠光を放つ貝殻を文様に切って、木地や漆塗りの面に嵌(は)め込んだり、貼りつけたりしたもの。厚貝法、薄貝法、割貝法などがあり、また、貝の裏に彩色したり、毛彫や彫刻をほどこす方法もある。日本には奈良時代にその技法が伝えられ、平安時代には蒔絵に併用されて独特の効果をあげた。青貝。貝すり。螺鈿押し」だけでなく、「**語誌** (1) この技法は、エジプト初期王朝以前から行なわれ、唐でも発達して、奈良時代に日本に伝わり、正倉院にも遺品がある。平安時代には、日本の技術が非常に進歩し、宋にも輸出して、日本が発祥と考えられるまでになった。〔以下 (2) (3) は略〕」といった詳説も添えてある。本家以上の発展を誇る記述は自国の伝統とする『漢語大詞典』とは同工異曲であるが、両辞書の出典を見る限りこの単語も宋へ行われたのと同様の逆輸出の印象が持たれる。『日本国語大辞典』の使用例(3点)の初出「正倉院文書-天平勝宝八年(756)六月二日・東大寺献物帳(寧楽遺文)“螺鈿紫檀琵琶一面”」に比べて、漢籍典拠「* 陸余叢考-羅填“賈相乃大喜，則螺填当_下作_上螺鈿_下為_上是”」は、清朝の歴史家・文学者趙翼の史論(18世紀末刊行)なので千年も後に成るが、『漢語大詞典』の3点中の初出「宋李心伝《建炎以来繫年要録・建炎元年十二月》」も、建炎(南宋皇帝宋高宗の最初の年号、1127-30)の事象を記した文献で相当遅れている。和文使用例の最後の「太平記(14C後)二〇・結城入道墮地獄事」では「羅鈿」と書くが、異体としての併記が無い「羅鈿」と『漢語大詞典』の同義の「羅甸」との関連は興味深い。

『新明解国語辞典』初版の「らでん①①【<螺鈿>】」(<)は当用漢字表外の字を包む記号。1字の場合は字の直上に<を付ける)の説明は割と簡単で、「貝がらの真珠色の光を放つ部分を薄く切り、漆器などにはめこんで装飾とするもの」にとど止まっている。他の両辞書の語釈の冒頭に出ている2種類の貝の日本独特の名称も採録されていないが、その冷遇を浮彫にする様に他の両辞書では惜しみ無く紙幅を割いて縷々と詳解されている。『広辞苑』の「やーこう【夜光】」の7つの子見出し中の1番目「-うん【夜光雲】」に次いで、次の様に微に入り細を穿って解説される「-がい【夜光貝】」の項目が有る。「リュウテンサザエ科の巻貝。サザエの近縁で、大型種。殻径・殻高とも二〇センチメ。殻は厚く、突起はないが、肩の部分の畝うねが強く、瘤こぶが連

続して巻く。表面は暗緑色、数条の淡い栗色帯があり、内面は真珠光沢がある。熱帯海域に産し、肉は食用。殻を古来螺鈿らでんに用い、真珠層を磨き出して杯など細工物とする。夜久貝やくぐ。グリーン・スネイル。』『日本国語大辞典』の語釈も百科事典的な綿密さを持ちつつ切り口や記述を可かなりこと也異にして、「(名) リュウテンサザエ科の大形の巻き貝。奄美諸島以南から太平洋熱帯域のサンゴ礁に分布する。殻はサザエで厚く、殻径約二五センチトの大きさになる。表面は青緑色で、褐色の斑紋があり、低いこぶの列がある。内面は真珠光沢が強い。“夜光”の名はあるが発光することはなく、屋久島から献上されたところから“やくがい”といい、それが変化した語といわれる。殻は古くから螺鈿(らでん)細工に使われ、正倉院宝物の中にもこれを用いたものがある。肉は食用になる。やこうのかい。学名は *Turbo marmoratus*」と述べており、空見出し「やこう-の-かい【夜光の貝】」も設けてある。中国語では地名の「屋久」(Wūjiǔ)と「夜光」(yèguāng)との語呂合せは有り得ないが、「内面は真珠光沢がある」半面「発光することはな」い夜光貝の性質と、夜光貝・鮑貝は「真珠光を放つ貝殻」と言う解説とを合せ考えれば別の観点が得られる。

注解

- 1) 金田一京助『金田一京助随筆選集1 心の小道 をめぐって』, 三省堂, 1964年, 1頁。1-8頁に収録された「片言をいうまで」の本稿引用中の文字・振り仮名・記号は原文の儘。猶、著者の随筆集『心の小径』(角川書店, 1950年)の様に、金田一京助も世間も「小道」「小径」の混用に無頓着の様である。
- 2) 両者間の「援助・交際」の美談の裏面に就いて、藤本英夫『金田一京助』(新潮選書, 1991年)第14章「模範的友情と『ローマ字日記』」(118-127頁)等に、様々な興味深い記述・見方が有る。
- 3) 佐々木健一著『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』, 文藝春秋, 2014年, 91頁。
- 4) 同上, 89-90頁。
- 5) 同上, 12頁。
- 6) 同上, 285-287頁。
- 7) 三浦しをん『舟を編む』, 光文社, 2011年, 117頁。
- 8) 高津祐典「ニッポン 人・脈・記 日本語の海へ□“舟”を編む 果てはない」, 『朝日新聞』2012年5月22日夕刊。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

汉语的奥秘 日语的机微 ——语文辞典释义、举例中所见双语神态及两国国情（1）

继 1990 年代前期《新明解国语辞典》（山田忠雄主编）以独特的释义引起瞩目后，2010 年代前期又因小说《编舟》及同名电影获奖而在日本涌现对语文辞典的关注。笔者作为多年研究日中语言异同的一环对两国语文辞典的释义、举例及形式等加以比较，以此探索两种语言的特质、两国辞典的特色乃至两国的国情、人情及文化、历史、传统等。

本部分以阿伊努语研究权威金田一京助“主编”诸多语文辞典实属挂名这一史实为切入点，选取《日本国语大辞典》、《广辞苑》、《新明解国语辞典》这 3 部大、中、小型辞典，与中国最大规模的《汉语大辞典》及颇具权威性的《现代汉语辞典》相对照，以本文论述所援引或使用的词语等为材料，就辞典的释义、举例、出典及背景说明等进行分析。

本文用自由联想、串挂展开的手法，将一系列义、音、形相同或类似、有关的词语相联系。如从金田一京助的“金字招牌”之“金字”的辞典释义引出“金粉”、“金泥”、“金浆”，在对比两国语言中的同义或异义、辞典采录情况等并作深层解读的基础上，进而引向下述的“金泥·金浆”字面所含“泥浆”不见于日语，“招牌”进入日语后未得立足及与日语相应单词“看板”各自所受选好的原因等问题。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）